

一八八二年十月十七日(火)

目が覚めると、信者たちはもう朝になっていることがわかった。聖ラーマクリシュナは子供のよう
に、裸のまま神々の御名を称え、称え、部屋のなかを歩き廻っておられる。時にはガンジス河を眺め
たり、神々の絵像のところへ行つては拝んだり、そうかと思えば、きれいなやさしいお声でしきりと
称名していらつしやるのである。時々はまだ、こう言っておられる。「ヴェーダ、プラーナ、タントラ、
ギーター、ガーヤトリ、バーガヴァタ、バクト、バガヴァン」ギーターを発音されるときには何度
もくりかえして、ターギー、ターギー、ターギー、とおつしやる。また時々、「あなたがブラフマン、
あなたがシャクテイ(力)、あなたがプルシヤ(精神源)、あなたがブラクリテイ(物質自然)。あなたがヴィ
ラート(宇宙/全体)、あなたがスヴァラート(個々の存在)、あなたが永遠絶対、あなたが遊戯者、あん
たが二十四の宇宙原理」

その間に、カーリー寺院とラーダーカーンタ寺院では暁の献灯(讃歌をうたいながら灯明を廻す礼拝供養)
が始まり、ホラ貝と鈴が鳴っている。信者たちが起きてあたりを見ると、カーリー神殿の花園では神
前に供えるための花摘みが始まっていて、いかにも朝らしい調べが波のさざめきのように音楽塔の方
から聞こえて来るのだった。

ナレンドラはじめ信者たちは、トイレや洗面など、朝の支度を済ませてからタクルのところへ戻つ

てきた。タクールは口元に微笑をうかべて、東南のベランダに西を向いて立っておられる。

ナレンドラ「五聖樹パンチャパテイの柱に、ナーナク派シーク教の修行者が何人か坐っているのが見えました」

聖ラーマクリシュナ「ああ、昨日やってきたのさ！（ナレンドラたちに）お前たち、皆いっしょに敷布マットに坐ってみておくれよ」

「信者たちが揃って敷布マットの上に坐ると、タクールは嬉しそうに眺めておられたが、やがて皆といろいろな話を始められた。ナレンドラは修行のことに話題をもつていった。

〔ナレンドラたちに女性と共にする修行を禁止——子供の態度はたいそう清浄である〕

聖ラーマクリシュナ「ナレンドラたちに向かつて）何より一番大事なのは信仰だよ。神様が好きになれば、識別グアイニエーカと離欲ヴァイラギヤはひとりでに起きてくる」

ナレンドラ「あのおう、タントラ派には、女性と一緒にする修行があるそうですね？」

聖ラーマクリシュナ「あれは、あんまりいいことじゃないね。大変難しい上に墮落する場合が多い。英雄の態度をとる修行と、女召使いの態度をとる修行と、それに、母子の態度をとる修行があるんだよ！ わたしの場合には母子の態度だ。女召使いの態度もいいよ。英雄の態度をとるのはとても難しい。自分はその御方の子供だ、という態度はたいそう純粹でいいものだ」

ナーナク派の修行者たちが、タクールにごあいさつに来て言った。——「南無ナモ・ナーラーヤナーヤ」
タクールは彼等に、坐るようにとおっしゃった。

〔神は全能——奇跡〕

タクールは話された。

「神様にとつて、何一つ不可能なことはない。あの御方がどんな相すがたでどんな性質か、誰にも口で説明することは出来ない。あらゆることが出来るのだ。二人のヨーギーがいて、神を見るための修行をしている。ナーラタ聖人リシがそこをお通りになった。一人は聖人リシがナーラタだとわかつて、こうお尋ねした——『あなたは、ナーラーヤナ(遍在全能神)のところから来られたのですね。あの御方は何をしておられますか?』ナーラタは——『見ての通り、わたしはナーラーヤナのところから来た。あの御方は、針の穴の中に象とラクダを入れたり出したりしておられますよ』一人が、『何の不思議もないことだ! あの御方にとつては、あらゆることが可能なんだから』と言うと別のヨーギーはこう言った——『そんなことが出来るものか! あなたは、まだあそこへ行ったことがないんだ!』

時間は九時近くなった。タクールはご自分の部屋に坐つていらつしやる。マノモハンがコンナガルから家族全部を引き連れてやってきた。マノモハンはごあいさつするとき説明した。

「これらをカルカッタへ連れていくところでございまして——」

タクールは、皆の元気な様子をお聞きになつて、

「今日はバッドロ月の一日ついたちでアガスチャなのに、カルカッタへ行くのか。いいのかい、わたしや知らんぞ!」とおつしやつて、ニコリと笑つて別の話を始められた。(訳註、アガスチャ——バッドロ月ついでちの旅立ちをいう。アガスチャ牟尼むにというヒンドウの聖人が、ヴィンディヤ丘から旅立つて再び戻らなかつたので、永

遠の別れの代名詞になっている)

〔ナレンドラに対して禪定デイヤナの教訓——深く沈むこと〕

ナレンドラと彼の友人たちは沐浴をしてきた。タクールは熱心に、ナレンドラに向かっておすすめになった。

「パニヤン樹の根元へ行つて瞑想をしてごらんよ。敷布をあげようか？」

ナレンドラと彼のブラフマ協会の友人たち何人かは、五聖樹台パンチヤパティで瞑想をした。時間は十時半ころである。タクール、聖ラーマクリシュナはしばらくの後、その場においてになった。校長も行った。そしてタクールは、次のようにおっしゃった。

聖ラーマクリシュナ（「ブラフマ会員たちに向かって）瞑想するときは、あの御方に向かって深く深く沈んで行かなくてはいけない。上の方にプカプカ浮いていちゃ、水底の宝玉たからはとれないだろう？」
こうおっしゃって、タクールは甘くやさしい声音で歌をうたい始められた——

心よ沈め　カーリーの名を称えて

わが胸の海深く宝の山あり

いくたびか潜りて黄金こがね見ずとも

君よあきらめることなかれ

こころざし堅く気力あふれて
母なるクンダリニーの郷里ふるさとめざし
ただひとすじに沈み行けかし

心よ 智慧の大海原は

浄福の真珠ゆたかにあり

君よ シヴァの教えに依りて

みずからの手にあまた集めよ

餌をもとめて往きかう六匹のワニも

ツイヴェーカ 識別ツイヴェーカという名のウコンの根汁を

身に塗りて行けば かれは近づかず

ラームプラサードは歌う――

ルビー、ダイヤは数知れず

かの水底に満ちてあり

いざ、飛び込みてその宝

わが手にザクザク集めよと

六匹のワニ――色欲、怒り等

ラームプラサードは歌うなり

〔ブラフマ協会、講演と社会的改革——先ず神を体得し、その後で人々を教導せよ〕

ナレンドラと彼の友人たちは、五聖樹台の台上から下りてきて、タクルルのそばへ行つて立つていた。タクルルは南に向けて、御自分の部屋の方に彼らといっしょに何かと話しながらお戻りになる。

タクルルはおっしゃる——「潜つていくと、ワニに襲われる心配があるがね、ウコンの根汁を体に塗つておけばワニは近よらない。わが胸の海深く宝の山ありだが、その海には色欲や怒りなんかの六匹のワニがいるんだ。けれども識別、離欲といった薬汁を体に塗つておけば、ワニどもはお前たちのそばに來ないからね。

学問だの、講義だの、いつたい何になるのかね？ 識別と離欲をそつちのけにしておいて——。神様だけが真実で、ほかは皆、はかないその場かぎりのもの。あの御方だけが実在で、ほかのものは皆、実在じゃない。このことを識別グイヴェーカというのだ。

先ず、あの御方を、自分の胸のお宮に祀りなさい。そのあとで講演でも講義でも、何でも好きなことをやれ。識別も離欲も実行しないで、ブラフマン（真理）、ブラフマン（真理）と言っているだけでは、どうにもなりやしないだろう？ ホラ貝の空鳴りだろう？

ある村にパドマローチャンという若者がいた。皆はかれのことを、ポド、ポドと呼んでいた。村には空ポドマデールき寺が一つあった。中には神像も置いてないし、壁にはアスワッタの樹やそのほか色んな草木が

生い茂っている。コウモリが住みついていていた。床はゴミとコウモリの糞でいっぱい。もちろん、寺には誰一人出入りすることもない。

ある日の夕暮れどき、村の人たちはホラ貝のひびきを聞いた。その寺の方角からホラ貝の音が、ボウ、ボウと聞こえてくるのだ。村の人たちはこう思った。——きっと誰かが、あの空き寺に神像を祀って、夕べのお祈りをしているのだらう、とね。子供、年寄り、男、女、皆揃ってわれもわれもと駆け足で寺の正面玄関に行ってみた。神像を拜ましてもらって、勤行を見ようと思つてね。ところが、パドマローチャンは片隅に突っ立ってホラ貝をボウ、ボウと鳴らしているが、神像も祀つてないし、寺の掃除もしてない——コウモリのフンもそのままだ。それでかれらは大声で叫んだ——

お堂に神さまも祀つてない！

バカのふくホラ貝なんか、まぎらわしいぞ！

十一匹のコウモリだけでたくさんだ——

もしも、自分の胸の宮に神像を祀ろうと思つたり、もし至誠なるものを掴もうと思ふのなら、ただボウ、ボウとホラ貝を吹いてばかりいてもどうにもならんよ！ 先ず、心の掃除をしなければね。心がキレイになったら、至聖清浄の御方が入っていらっしゃつてお坐り下さる。コウモリのフンも片付けないのであつては、祭神をお招きすることはできないよ。十一匹のコウモリというのは十一の器官のことだ——つまり五つの感覚器官(目耳鼻舌皮膚)と五つの行動器官(口手足肛門生殖器)と心だよ。先ず第一に祭神をしつかり据えて、それから、望みとあれば講演でもしたらいい！

先ず最初に深く沈むことだ。沈んでいって宝玉たまを取って、そうしてから他の仕事をする事だ。

ところが、沈もうとする人は滅多にいない。修行もせず、祈りもせず、識別も離欲も実行しないで、二つ、三つ、何か覚えるとじきに講演だ！

人を教え導くという事は難しいことなんだよ。至聖かみなるものを覚った後で、もしその御方の指図があれば、はじめて人を導くことができるようになる」

〔無明の妻——真正ほんとうの信仰を持てばすべての者は従い来る〕

話を続けながら、タクールは北のペランダの西端まで行かれて立っておられた。モニがそこに立っていた。タクールはくり返し、くり返し、おっしゃる——『識別ウイウエーカと離欲ヴァイラーキヤを実行しなくては、至聖かみに触れることは出来ない』モニは結婚していたので、焦燥感に駆られながら思うのだった。ああ、どうしたらいいのだろう！ 自分は年は二十八、大学に通って英国式の教養を身に付けている。識別ウイウエーカと離欲ヴァイラーキヤとは結局のところ、女と金を捨てることではないのか？

モニ「聖ラーマクリシュナに向かつて）もし妻が、こう申しましたら——自分にかまってくれなかつたら自殺する——と申しましたら、どうすればよろしいのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナは、重々しい声で答えられた。

「神へ行く道を邪魔するような妻は、捨ててしまえ。自殺でも何でも勝手にさせろ。神への道を邪魔する妻は、無明の妻だ！」

深く物思いに沈んだモニは、壁に寄りかかって立ちつづけていた。ナレンドラはじめ信者の群れも、しばらくの間、衝撃を受けて黙りこくっていた。

タクールは、彼等と少し言葉を交わしておられたが、急にモニのそばに近づいて行って、静かに彼にだけ聞こえるようにおっしゃった。

「だがね、神を真正に信仰していれば、あらゆる者が従い来るようになるよ。王様でも、悪人でも、それに女房でさえも従うようになるんだ。自分が真正に信仰していれば、女房だつてだんだんと神の道に入ってくるようになるよ」

モニの思い煩いは雲散霧消した。彼は、自殺させるなんて、ああ、どうしたらいいだろう、という思いで、胸を塞がれていたのであった。

モニ「聖ラーマクリシユナに向かつて」この世は、全く恐ろしいところでございますね！」

聖ラーマクリシユナは、モニとナレンドラたちに向かつて、

「そうさ、だからチャイタニヤ様はいつもおっしゃっていた——『よく聞け、ニティヤーナンダ、この世に巻き込まれた生き物は、どんなときでも動きがとれない』と」

モニだけにそーっと——「神に対して純粹な正しい信仰がなかったら、どうにも救われる道はないんだよ。神をつかんでからこの世に住んでいる分には、何の恐れもない。独りで静かな処で靈の修行をして、正しい信仰をわがものにして、それから社会生活をすれば、もう何の恐れも心配もないんだよ！チャイタニヤ様には在家の信者もあった。その人たちは名前だけの在家だった。この世のことに、何

の執着もなく生活していたんだからね」

神殿の神々に食べ物が供えられた。音楽塔^{ナハバト}からは曲の調べが聞こえてきた。今度は、神々が御休息なさる時間である。タクール、聖ラーマクリシュナは食事の席につかれた。ナレンドラはじめ信者一同は、今日もタクールのおそばで、神々の供物のお下がり（ブラサード）を食べるのである。